赤津の国指定史跡『瀬戸窯跡』

瀬戸市内では、現在「瀬戸窯跡」として2か所の窯跡が国の史跡として指定を受けていますが、それらはいずれも赤津地区に所在しています。一つは「瓶子陶器窯跡」、もう一つは「小長曽陶器窯跡」です。

瓶子陶器窯跡

尾張藩士の名が記された付け札
※愛知県埋蔵文化財センター提供

瓶子陶器窯跡では、17世紀中期～末期の江戸時代に操業した窯体が2基確認され、そのうちの一つは大窯と連房式登窯の連結窯でした。発掘調査では茶入など、大量の茶道具が出土しており、さらに当時の尾張藩士の名が書かれた「付け札」が出土していることから、藩士から注文を受けた茶道具を生産していた窯として注目されています。寛文12(1672)年編纂の『茶器弁玉集』には、「瀬戸竈所之次第」という項目があり、そこには瀬戸のどこの窯でどんなものが焼かれていたかが記載され、それぞれの製品の評価がしてあります。その中の「瓶子竈」という項目には「藤四郎此竈ニテ唐物ヲ焼ト云説アリ」と書かれています。「藤四郎」とは、鎌倉時代に瀬戸で初めてやきものを焼いた伝説の「陶祖」を指していることはいうまでもなく、このことから当時の人々の、瓶子窯に対する評価の高さが伺えます。

小長曽陶器窯跡

発掘調査で出土した茶入

小長曽陶器窯跡は、もともと室町時代に「古瀬戸」を生産した窯ですが、この窯は古くから知られていたようで、江戸時代の「春日井郡赤津村絵図」には窯場として「小長ソ」の名がみえ、また、天明8(1788)年に完成した『張州雑志』には、「藤四郎藤九朗時代古窯地名」の一つとして紹介されています。つまり、江戸時代の人々は、小長曽陶器窯跡を古い時代の「窯跡」として既に認識していたということになります。

さらに、同書には「平・小長曽の窯　元禄12(1699)年、(藩主の)命ありて彦九郎これを焼く」といった記載があります。この際、彦九郎は室町時代の「窯跡」である小長曽陶器窯跡を改修し、再利用したと推測されていました。現在残されている窯体の中程には、一般的な窖窯にはみられない5本の細い柱が立ってますが、これが江戸時代の改修の際に加えられたものと考えられます。平成12(2000)年に行われた発掘調査では、窯体の手前で大きな穴が見つかり、その中から江戸時代のものと思われる茶入がおよそ40個、ほとんど完全な形で出土しています。この発見によって、『張州雑志』の記述が真実であったことが証明されました。

赤津～赤津「やきものの故郷」～

赤津の中世窯業～やきもの産地「赤津」のはじまり～

古瀬戸製品

赤津は、古くは「飽津」と書かれ、それが転じて今の「赤津」となったとされています。赤津でやきものがつくられ始めたのは概ね14世紀の室町時代に遡りますが、続く15世紀には現在の瀬戸市域の中で最もやきものづくりが盛んな地域となり、山奥の所々で窖窯と呼ばれるトンネル状の窯が煙を上げていました。その頃には、すでに器の表面に釉薬が掛けられた「古瀬戸」と呼ばれるやきものが生産され、日本全国に出荷されていました。現在も、赤津の山の中には室町時代に操業した窯跡が数多く遺っています。

江戸時代の赤津村～「御窯屋」の登場

16世紀後期になると、現在の瀬戸市域ではやきものがつくられなくなり、当時の窯屋が美濃へと移り住んだことがわかっています。かつてはこの現象を「瀬戸山離散」と称し、中世以降、全国にその名が知れ渡った瀬戸窯の衰退と認識されていましたが、現在は織田信長の美濃への進出に伴い、より窯屋経営に有利な地へと移転した「瀬戸窯大発展の時代」と考えられています。

そうした時代を経て、江戸時代になると再び瀬戸窯が再興されていきます。赤津もそのうちの一つで、慶長15(1610)年に、徳川家康の意向を受けた尾張徳川家が美濃国郷ノ木村(現在の土岐市曽木町)から利右衛門・仁兵衛兄弟を赤津村に呼び戻したのがその始まりといわれています。彼らは尾張藩から様々な保護を受けるかわりに、寛永9(1632)年頃から、「御窯屋」として尾張藩の御用を務める窯屋となり、他の窯屋とは異なった身分を有するようになりました。さらに、万治元(1658)年には、分家の太兵衛家が加わり、「御窯屋三家」として名古屋城内の御深井窯や横須賀御殿(愛知県東海市)や戸山別邸(東京都新宿区)の臨時窯等で御用を務めました。彼らは、藩の御用を務める際、当時主流となっていた連房式登窯ではなく、古い時代の窖窯や、戦国時代に使われた大窯と呼ばれる窯を使用することがありましたが、これは、それらの窯で作られたものに、他に類を見ない優品が数多く残されていることが理由となっています。つまり、彼らは作り上げる作品だけでなく、その製作過程にもこだわりを持って御用を務めており、そうした歴史的背景を持つ赤津が、やきものの故郷と呼ばれる所以となっています。